

「とけあい動作法」を用いた ペアレントトレーニングの有効性について

○石井 里穂
(新潟市立大通小学校)
KEY WORDS : とけあい動作法

有川 宏幸
(新潟大学教育学部)
ペアレントトレーニング 愛着

I. 問題と目的

本研究の目的は、ペアレントトレーニングという位置づけとしての『とけあい動作法』を用いた愛着促進プログラムの開発・普及を目指すため、発達障害児とその母親を対象に、母親が援助者として初めて「とけあい動作法」に取り組む際、「とけあい動作法」を習得するために効果的なプログラムについて検討することである。

II. 方法

1. 参加者

4歳の自閉症男児(以下A児)とその母親の親子(I組)、5歳の自閉症・ADHD女児(以下B児)とその母親の親子(II組)の計4名2組の母子が参加した。4名とも、研究参加前まで「とけあい動作法」の知識経験等はなかった。また、参加者には本研究について十分説明を行い、参加と研究発表の同意を得た。

2. 手続き

本研究は多層ベースラインデザインで行い、各回の「とけあい動作法」開始前に、一定の場所と玩具を使用した10分間の「母子遊び」場面を設定した。その後、「とけあい動作法」を1試行あたり5分間に設定し、母子間の「肩へのとけあい」を計24試行実施した。

参加者に提供した「とけあい動作法テキスト」は、石崎・有川(2016)によって大学生を対象として作成されたもので、その有効性が明らかにされている。今回、それをもとに筆者が母子を対象とした仕様に改訂したものを使用した。

各フェーズは下記の条件で行われた。

①介入1期: テキストのみを提示する条件で「とけあい動作法」を行った。

②介入2期: テキストに合わせて筆者が母親に「とけあい動作法」を行った。その後、母子間で「とけあい動作法」を行った。

③介入3期: 筆者・母親・子どもの順で3人が1列になり、まず筆者から母親へ、その後すぐに母親から子どもへという順番で「とけあい動作法」を行った。その後、母子間でのみ「とけあい動作法」を行った。

各介入期間の終わりに、筆者及びN大学K学部T専修に在籍する「とけあう体験」を経験しているE氏が母親による「とけあい動作法」を体験し、今野(2005)のとけあい動作法尺度を用いて7段階で評価し、その一致率を算出した。

3. データ

(1)「とけあい動作法」パフォーマンスの変化について、ビデオ記録を分析対象とし、今野(2005)をもとに「肩へのとけあい」を課題分析した7項目について正誤評価をした。

(2)「とけあい動作法」体験の変化について、母親が、「とけあい動作法」場面1試行が終了するごとに7段階の「とけ

あい動作法尺度」を用いて体験の評価を行い、得点化した。

(3)「母子遊び」の経過について、ビデオ記録をもとに、笹川・小田・藤田(2000)の「母子遊び」の経過の分析方法を用いて、母子間の相互交渉の質的変化・量的変化・始発の変化の3つのカテゴリーに基づき、経過の分析を行った。

III. 結果

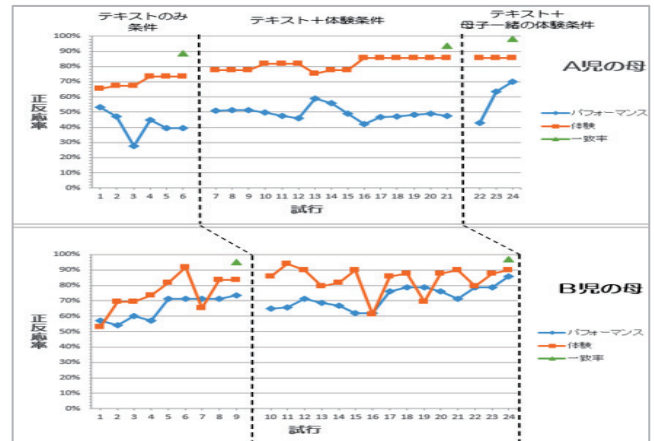


Fig.1 「とけあい動作法」パフォーマンスと体験の変化及び、一致率の変化

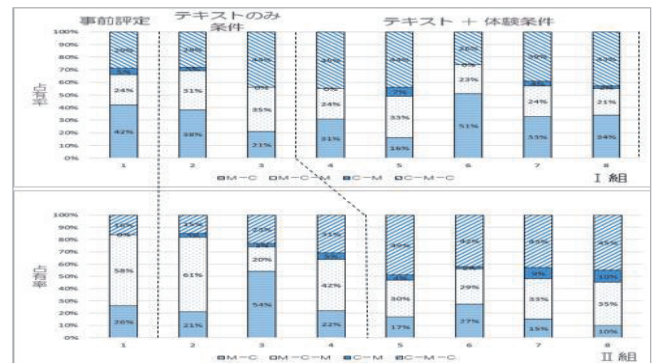


Fig.2 母子相互交渉の量的変化

パフォーマンスは、両母親が「とけあい動作法」を実際に体験した後から正反応率がより安定し、体験もパフォーマンスの上昇に伴い、高い数値をより安定して示すようになった。

「母子遊び」場面では、量的変化として子ども始発のやりとりが増え、遊びの中での母子相互交渉も増加した。

IV. 考察

援助者である母親も実際に体験し、「とけあい動作法」を通して母子間で体験を共有することで、より深い共感関係が生まれ、母子間の積極的な相互交渉が促進されたと考えられる。今後、さらなる検討を進めていくにあたり、母親自身が「とけあう体験」の感覚を十分に経験し、体験を深める過程を重視したプログラムを考案していくことが必要であろう。

(ISHII Riho, ARIKAWA Hiroyuki)